

埋蔵文化財と文化財建造物の情報誌

文化財センター季刊情報誌 【かざぐるま】

2010秋号

52

財団法人 和歌山県文化財センター

「神前遺跡の発掘調査」歌山橋本道路改良事業に伴う

表紙写真:神前遺跡弥生時代の水路

和

歌 Щ 橋 本 道 路 改 良 事 業に伴 う 神 盯

れ東 Oで続く 西 7 南 七 跡 麓 1) 前 で、 ま に 橋 遺 位 Щ す \bigcirc 集 跡 落遺 弥生 置 塊 m \mathcal{O} 跡 7 南 時 南 和 お 代 北 に 歌 位 り L 前 四 Ш 置 7 期 五. 市 遺 す 知 か \bigcirc 神 Ź 跡 5 5 前 m と 0) 福 れ 江 に 考 範 飯 7 戸 所 えら 用 い時 ケ 在 は 峰 ま 代

うえ た。 伴う 出が 戸 調 屋 0) 金 査 で貴 た弥 見さ 代に を六 発 跡 銅 調 口 は 製 査 掘 重 鈴 れ か 調和 生 O月 結 時 な 7 け か 査 歌 神 5 成 代 前 室 7 果 V と Ш 、ます。 果 遺 町 0) 0) 橋 各 とな 跡 時 水 弥 月 7 本 路 生 代 時 O線 に から ŋ 実 跡 中 代 時 か 約 道 ź 態 P 路 で \mathcal{O} 代 け 兀 を解 江 Ł L 遺 前 7 改 た 古 構 期 戸 兀 良 明 時 墳 多 か い四 工 代時 数 遺 5 す ま m² 事 物 る の代検 江 \mathcal{O} に

出生 生 ま 代 時 5 前 l た期 代 m では か 0) 溝 幅 5 弥 <u>\</u> 生 內 時 では か m代 5 中 数少 南 深 期 さ 0) 並 0 溝 な を 行 い 8 検 弥

> す。 と 続 曲路 ŧ 7 から き、 なり と 同 れ 水路 ま 東側 $\langle \cdot \rangle$ じ 方向 ゔす。 溝 へきく 跡と考えられ で 0は、 分岐 を示 調 溝 東 査 Oはする溝 南 地 数 弧 北二〇 0) は を 東 調 計 描 :も見 ま を 査 流 Ŏ い 区 5 7 m 中 れ 本 以 流程 れ る 以 £ る れ で 用 上 ح ŧ ま 屈水

標 5 とみら り 田 生 0) 1 高 が 3 で 溝 の取る石庖丁が見 何からは完形のh ŧ 水 時 ま 稲 わ 水 が す。 代 路 L 作 低 田 れ た。 稲作 れ が Oを ま 開 通 伝 弥 おそらく、 す。 ま じて水 生時 始とともに、 す。 が わったことを示す事 調 行 代にも 弥生土 見 今回 わ 查 が れていたことがう つ 地 流 水 田 水 か \mathcal{O} \mathcal{O} 器 さ つ 調 南 田が広 神 7 や れ 東部 査に 前 は お 7 遺 り、 稲 ょ 分 がが 跡 例 た Z 穂 り、 は、 に れ つ 周 を

7

か 辺 摘

れ 7 が 使 お り、古墳 わ 墳 れ 古 時 7 墳 代 時 に たと考えら 代も 中 新 期 た に に は溝 が ま 再 掘 す。 び 削

水 さ な

水 弥

O



調査区周辺の状況(上空から)

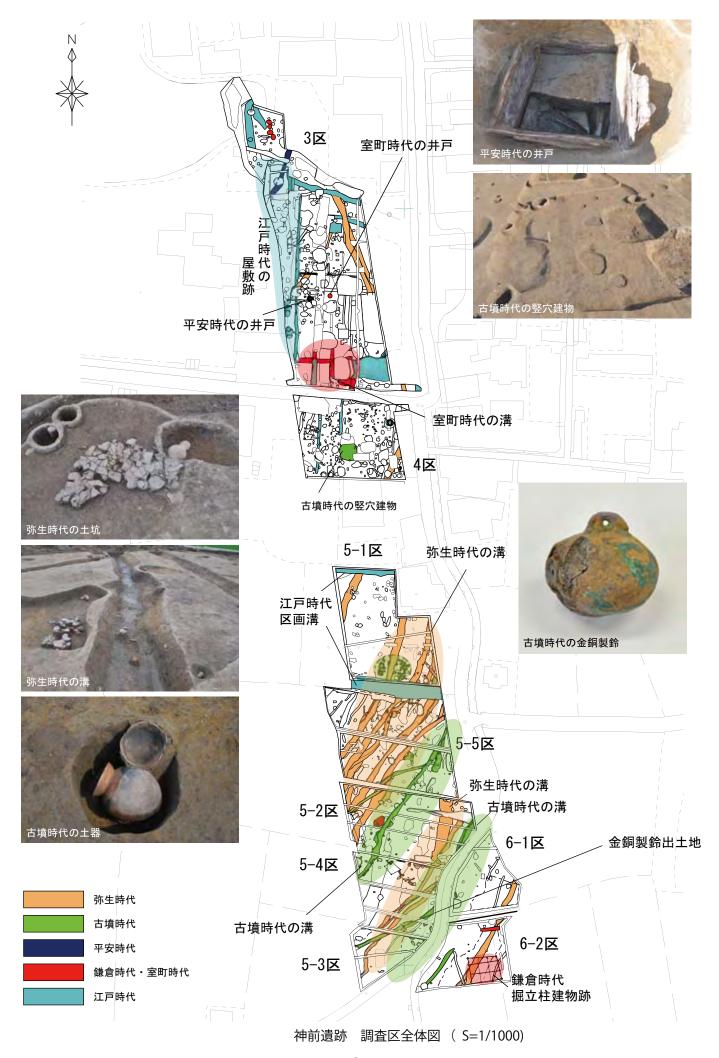
和田遺跡

井辺前山古墳群

井辺遺跡

神前遺跡

今回の調査地



代 大 から考えると、 谷 墳 0 墳時 に代 鈴 次 中 が 出 (V 期 で2 土 0) 溝 日 L てい 本に鈴が伝来して 例 か 目 5 ます。 のは、 出 県 土となる その年 内 で t

に 屋

は

築山

と考えられる丘

陵 查

بح 地 井

石 西 れ す

垣

残ってお

り、

昭和

まで大きな屋

敷 江

跡

を検

出

L

ました。

調

0) ま ま

側 た

戸

時

代に

は

石

垣と溝

間

Ł

な

い

時

期

0)

Ł

0)

と

推

定

さ に

れ







分は調 ません を検 であ は は、 れ も 室町時代の井戸や、 であることがうかがえます。 が見つか 桶 ま 検 地 り、 り、 屋敷跡 がありました。 出 唐 出 和 地 歌山 が、 割 津 査 L L 溝、 べってい 遺物から見ても立派な屋敷跡 大皿や、 地 7 ており、 が存在した可能性が考えら 城下で出土するようなも 石 0) います。 垣の周辺では、 西側となり状 廃 棄土 ・ます。 焼塩壺、 室町 地割溝、 屋敷跡の 坑 (穴)、 出 Z 土遺 時 れ 代 土人形など 況 0) 5 物 井戸、 から さら 主 廃棄土坑 は 0 0) 配 一要な わ 継続 水溝 遺 中に か に、 物 部 0) ŋ 埋

考えら 資料に見られる雑 こうした屋 郷に れ 属 ま はする神 す。 Ш 敷跡を築い 直 神 春起 前 前 賀 五. 氏に関連する文献 氏 請 組 に 文 たの 関 のうち、宮(社 (室町 係する者と は、 時代) 文献

> た ていることが示されてい 0) 前の 雑 中 雑 て の 賀 務 賀 攻 丞 Ŧī. め 組 神前 と Oに 時 関 に 中 う する 人物 織 務 丞 田 方に が 述 は ま あ \mathcal{O} 便 り 中 宜 ま す。 田 信 図 ま 長

と呼 たります。 んが、 が、 たとみられます。 りによりわ という方の所有であったことが 存 神 在する丘 直 前」という姓であったの 神前 ばれています。 接 明治以前は、 この _ 的 中 な 屋敷 務 陵は「中務 かりまし 手 丞 掛 が築かれ か また、 この屋 が活躍した時代に当 りで た。 偶然かも 0) は た 敷 調 築 中 あ のはちょう Ш 地 查 務 を改 りませ L 地 氏 は 聞 れ 北 は 中 塚 <u>Ű</u> ま 西に 姓 元 き取 務 せ 々 氏 h

掛 す。 神前 関 と大きく 連 今 物とかかわるのか か ·回 見 する 郷の 今回 りを示す成 |の調査 5 有 可 かった屋 力者である神 成長を遂げた神 能 性 果が得ら により、 が 高 敷 わ い 跡 かりません と考えられ 中 ħ :前氏の は、 ま 前 世 から近 集 直 ベ落の手 末裔 接この が、 ま 世

田 元 浩 津 村 か ?おり)

熊野本宮大社の保存修理が始まる

第四殿の三棟は、 第一殿・第二殿(これで一棟)、第三殿、 りました。現社地に建つ建造物のうち、 年に熊野川を見下ろす高台の現在地に移 被害をこうむり、これを契機に明治し 治二二年(一八八九)の大水害で大変な 大斎原」に構えられていましたが、 熊野本宮大社は熊野三山の一つとし 社地はかつて熊野川と音無川の中州 古代より多くの信仰を集めていま 旧社地から移築されたものです。平 一九世紀前期に建設さ 三四四 明

> 定されています。 貴重なものとして、 成七年に、 熊野三山 .の社殿形式を伝える 国の重要文化財に指

み、 なり、六月に着手の運びとなったもので そこで熊野本宮大社では、平成二二年六 務を受託しました。 す。当センターは修理事業の技術指導業 根の葺替と縁まわりの修理をすることに 月より平成二四年九月までの計画で、屋 三棟は近年になり檜皮葺き屋根が傷 葺き替えが必要になっていました。

修理工事はまず始めに第三殿の屋根工

です。 恐れ多い、との配慮でしょうか。 も、ここで雨を受けることが出来る造り といいますが、ここでは割板を葺いた土 皮をめくると、なるほどその下にさらに 重になっていると伺っていましたが、檜 をしたのです。神社の方から、 第一殿・第二殿に御祭神が仮遷座されま 祀りしています。七月一七日の夜、 である家津美御子大神皮葺、妻入の社殿で、木 屋根が現れました。この屋根は「野屋根 素屋根を建設し、傷んだ檜皮屋根の解体 した。これを受け工事用の仮屋根である 事に取りかかっています。 居葺になっていました。もし雨漏りして ともに造営されました。 元年(一八〇一)に、第一 一間、 御祭神にもしものことがあっては 正面一間向拝付、 仲(素盞鳴尊)をおった。本宮大社の主祭神本宮大社の主祭神 桁行三間、 一重入母屋造檜 殿·第 屋根が二 一殿は享和

様子をお伝えしていきます。 修理しています。本紙では随時、 木が棟に載りました。現在は飾り金具を 第三殿は檜皮葺きを終え、千木、 (御船達雄 現場の







海人の世界 謎の棒状石製品一

富加見 泰彦

『古事記』『日本書紀』の国生み神話にイザナギ、イザナミの二神が天上の「天の浮橋」に立っ て「天の沼矛」をもって青海原をかき回し、その矛を引き揚げたところ矛の先から滴り落ちる 潮が凝り固まって一つの島となった。これが「おのころ島」で、次にできたのが「淡路島」と なったというくだりです。

淡路の海人が語り伝えたといわれる国生み神話が『記紀』に組み込まれたのは、信憑性は ともかく、淡路の海人とヤマト王権が浅からぬ因縁があったからと思われます。『日本書紀』 の「野島の海人」の話もそれを傍証する記事だと思われます。淡路島からは棒状石製品と称 される遺物が出土します。これが「天の沼矛」にあたり、製塩の「攪拌棒」、アマが使用する「ア ワビおこし」等、古くから様々な解釈がなされてきました。

鳴門海峡に面した伊毘漁港の沖合に浮かぶ 沖ノ島は、古墳時代後期の古墳が群集してい ますが釣り針等の海の生産用具が出土し、海 を生業とした海人たちの奥津城であったと考 えられています。この沖ノ島古墳群からは、 6本の棒状石製品が出土しています。長短2 種があり、石材は結晶片岩で全面研磨し丁寧 な作りのものと粗製品があります。類例とし てしだるま群集墳、鎧崎古墳群からも出土し



沖ノ島古墳出土棒状石製品

ています。古墳に副葬されるということは海人にとって黄泉の世界においても重要な意味をも つ遺物であったことは想像に難くありません。これまで淡路島以外では出土せず、独自の遺物 として理解されてきましたが、最近、紀淡海峡を挟んだ紀伊半島の海浜部・島嶼の遺跡からも この棒状石製品が出土することが分かってきました。管見では和歌山市西庄遺跡では3号墳、 4号墳をはじめ10本以上出土しています。有田市地ノ島遺跡や広川町(出土地不明)でも確 認されています。

古墳から出土する棒状石製品は、淡路、紀伊とも6世紀後半でほぼ同時期だと解釈されます が、西庄遺跡の集落域から出土する棒状石製品は共伴遺物からみて5世紀代で、地ノ島遺跡例 も同様の時期です。このことから、紀伊半島がその初現と考えるのが妥当かと思われます。用 途については、対馬出土の弥生時代の鯨骨製の「アワビおこし」とは形状が異なることから「ア ワビおこし」には不適格だと思います。むしろ、土器製塩にかかわる攪拌棒説は話として魅力 を感じます。確かに沸騰した鹹水を一時的に鎮める効果はありますが、同時にいろんな疑問も 湧き、自身を納得させる答えを引き出せずにいます。

かつて、加太の漁師さんから「昔から加太と洲本の漁師は親交があって、新造船ができると 自らの船で祝いをもっていく」と聞いたことがあります。紀淡海峡を挟んで古墳時代から海人 の交流が脈々と受け継がれてきたことに驚いたことを覚えています。棒状石製品についても海 を媒体として淡路、紀伊の海人に共通する遺物であることは間違いのないところです。

築彫刻の話 (10)

という不動明王の変身した姿 刻 町 を表したものでした。 に巻き付いた龍が彫刻されて います。これは倶利伽羅龍王 にある三船神社の脇障子 って右側の脇障子には の話です。前回紹介した向 前 回に続き、紀



ありません。 物であることを考えれば、当時としては何ら違和感はなかったに違い 高野山領で、しかも高野山の僧、木食応其上人によって再建された建な取り合わせに思われます。でも、三船神社のある安楽川庄は当時は に雲と梵字が彫刻されています。神社にお坊さんとは、これまた奇妙 今回は左側の脇障子彫刻です。ここには波と龍と僧侶、 そして上方

りません。波の中から不動明王がお坊さんを助け出したという場面を ンという不動明王を表す文字です。とすれば、 きの鍵は、龍に支え上げられた僧侶、波、そして梵字です。梵字はカー 表した彫刻と思えるのです。 それにしてもこの彫刻は何を語ろうとしているのでしょうか。 龍は不動明王に違いあ 謎解

王が一難を救いました。この彫刻はまさにその場面を描いていると思 王は波切り不動として、 えるのです。僧侶は弘法大師に違いありません。龍に変身した不動明 嵐にあって遭難の危機に遭います。その時空海の祈りに応えた不動明 弘法大師空海は、唐に渡って密教を相伝し、日本に帰る途中、 今も高野山で信仰をあつめています。 船は

(鳴海 祥博

掘屋余話 (10)

カイロなどない時代でしたから子どもなりの生活の知恵だったので げた臭いと吐く息の白さが思い起こされます。今のように使い捨ての しては、携帯のカイロ代わりに使っていました。毛糸の手袋の少し焦 よくその中に手の平サイズの石を投げ入れ、しばらく暖めた後取り出 めました。もうすぐまた寒い冬がやってくるのでしょうね。 晩秋。この夏の厳しい暑さが嘘のように朝夕めっきり冷え込みはじ 幼い頃、小学校への道すがら大人たちが焚火をしていると、

かい石と書いて「おんじゃく」と読みますが、中世の遺跡を掘ってい 戸期にかけて盛行するものでしょう。 ると稀に出てくる遺物のひとつです。おそらく平安後期から出始め汀 これと同じ原理を用いたものに「温石」というものがあります。

がありますが、これは火鉢などから針金状の金具で取り出すために穿 大きさと言っていいでしょう。隅のほうに小さな穴があいているもの 多いのは滑石、それも壊れた鍋などを転用して再利用したものが多い たれたものでしょう。 前後、厚さは2㎝ほどとちょうど布切れに包んで懐に入れるのにい ですね。大きさは様々ですが、平均的な大きさとしては、8m×12m 材質としては、蛇紋岩、角閃石などが知られていますが、 もつとも

ね。現在は酸化熱を利用した使い捨てカイロが全盛ですが、昔の人の めて一時の空腹を紛らわすほどの簡素な料理という謂いなのでしょう ちなみに懐石料理の懐石とはこの温石と言われています。 知恵が偲ばれる一品です。 お腹を暖

それにしても筆者の懐は季節を問わず寒いですねぇ。 落ちも寒いか

催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報

(財)和歌山県文化財センター http://www.wabunse.or.jp/

○シンポジウム「寺を造る―北山廃寺を支えた古代の技術―」

会場:紀の川市貴志川生涯学習センター講義室1 (紀の川市貴志川町長原 447-1)

期 間:平成23年1月23日(日)午前10時~午後4時10分

内 容:当センターでは2ヶ年にわたって、古代寺院である北山廃寺と、その周囲の発掘調査を実施してきており、 現在整理作業を進めています。古代寺院は当時最先端の技術を駆使して造られたもので、調査では、その 技術の一つ、瓦を焼く窯がみつかるなど、寺院の様相のみならず、寺を支えた様々な技術も、知ることが できました。こうした成果をいち早くお知らせします。

県立紀伊風土記の丘 http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/

○企画展「秋期特別展 いのりのかたち~祈願の民具と民間信仰~」

期 間:平成22年10月9日(土)~12月5日(日)

内容:学文路苅萱堂の「人魚」、御坊市の「生身迦ル羅王尊像(カラス天狗)」、慈光圓福院の「雷獣」・「烏天狗頭骨」 など江戸時代から伝わる信仰対象の空想上の生物が一堂に展示されます。

○スポット展「初公開!大日山35号墳の家形埴輪」

期 間: 平成22年9月23日(木)~12月12日(日)

内容:大日山35号墳で出土した家形埴輪の復原成果が一般に公開されます。

和歌山市立博物館 http://www.wakayama-city-museum.com/

○特別展「紀州徳川家のお姫さま」

期 間: 平成22年10月23日(土)~11月23日(火)

内容:江戸時代、紀州徳川家の治世の裏には、それを支えた多くの女性たちがいました。歴代藩主の正室・側室・姫君を中心に、 紀州徳川家ゆかりの女性たちにスポットがあたります。

和歌山城天守閣 http://www.city.wakayama.wakayama.jp/menu_1/gyousei/wakayama_siro/menu.html

○御橋廊下復元3周年記念企画展 「甦った御橋廊下一発掘調査・古記録 から復元までの軌跡ー」

期 間:平成22年10月3日(日)~11月23日(火)

高野山霊宝館 http://www.reihokan.or.jp/index.html

○ 2010 年度秋期企画展「海を渡る名宝-アジアの中の高野山」

期 間:平成22年10月2日(土)~12月12日(日)

内 容:中国や朝鮮半島から高野山にもたらされた名品を幅広く紹介し、高野山と近隣アジア諸国とのつながりを考えます。中国 宋時代や、高麗から朝鮮時代にかけての貴重な仏画、伝世品 が少ない中国唐時代の密教法具の美をお楽しみください。 高麗時代の精緻な写経の中には、高野山へ奉納のため、博多の僧侶が買い求めたものもあります。 奥之院灯籠堂・御廟 周辺埋納の、中国由来の磁器や古銭なども見どころです。

(財)和歌山県文化財センター現場事務所等一覧

【埋蔵文化財課分室】

- ◎和歌山市新在家 61番地-4 TEL 073-472-3710
- ○和歌山市土佐町2丁目58-3 TEL 073-427-6174

【文化財建造物修理事務所】

○金剛三昧院保存修理事務所 伊都郡高野町高野山425TEL 0736-56-5578 催し物案内「発掘屋余話」「建築彫刻の話

8

きのくに歴史小話

7

6

載コラム

考古学の散歩道

5 文化財建造物課 短信 2 特集 和歌山橋本道路改良事業に伴 1 表細 神前遺跡の発掘調査」

冒

風車 52 (2010 秋号)

平成 22 年11月19日発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404

和歌山市湊 571-1

TEL 073-433-3843 FAX 073-425-4595

E-mail maizou-1@wabunse.or.jp URL http://www.wabunse.or.jp